interview

当館では2014年より、企画展にあわせ横浜市民ギャラリーにゆかりのある方々のインタビューをおこなっています。今回は出品作家の柴田昌一氏にお話をお聞きしました。

※インタビュー映像を展覧会場で上映します。
また、横浜市民ギャラリーホームページ上で公開する予定です。

柴田昌一 インタビュー

2020年12月4日　柴田昌一氏ご自宅にて
聞き手・編集：齋藤里紗

—幼少期から美術学校時代

絵に関心を持ったのは父の影響が大きいです。父は、静岡で蒔絵師として修行していましたが、戦局が怪しくなり蒔絵師を断念、横須賀の海軍工廠（こうしょう）に来て旋盤工になり、私たち家族を支えてくれました。しかし、その後も趣味として水彩や油絵を描いており、その様子を見て私も自然と絵が好きになりました。絵を描き続けるために絵の先生になろうと、武蔵野美術学校の美術・図工教員養成科に入り、東京で新聞屋に住み込んで学校に夜間通いました。学校は様々な職業を持つ人たちと一緒になりました。一番親しい人は都電の運転手でした、童画家で自立している人もいました。教授たちとの関係も密で、授業が終われば モデルさんも誘い皆で一杯飲みに行っていろいろ話し合いました。学校で絵画、彫刻、デザイン等多んだのもよかったですが、自由に話し合った場で培ったものが大きかったと思います。

—加藤清美氏と銅版画

銅版画をいいなと思ったのは、昔桜木町にあった最初の横浜市民ギャラリーで加藤清美さんの作品を見たときです。あの頃はアンデパンダン展や公募の国際展など、現代美術が盛んで熱気にあふれていました。私も大きなプラスチック作品や電気仕掛けの立体作品などをつくりました。当時私が働いていた日本水上小学校が空き教室のへっを貸してくれ、そこをアトリエに使わせてもらいました。ところが立体作品は面白いのですが時間も お金もかかる、そして持ち運びが大変。表現としては爆発的に外側に打ち出すようなところがあります。しかし加藤清美さんの作品の銅版画を見たときには逆の印象を受けました。非常に求心的、内面的。あの方は使で聞いたらクリスチャンでしたので、そういった影響もあったのかもしれません。銅版画はそんなに広い空間がなくても制作できます。持ち運びも楽です。それから加藤さんの書かれた技法書を読んで、独学で銅版画の制作を始めました。その後、私も出品しやがて会員となった同じ日本版画協会の会員でしたが、クリスチャンの作家として尊敬する版画家のお一人でした。

—作品のモチーフとテーマ

人間はあまり描かないです。人間の日常的な姿より内面を表現したいと思っています。スタンリー・キューブリックの「2001年宇宙の旅」[1]に、モノリスという長方形の物体が出てきます。それは物質であって物質でない。今でいうとAIですよね。昔、木星に知的生物がいて、彼らがつくったモノリスがホモサピエンスを育て宇宙船で木星へ向かわせる話なのですが、そのモノリスを見て四角のあるも風景を描きたくなりました。現代は地球規模の危機があります。温暖化、異常気象の発生は、人間がもたらしました。核の存在もその一つです。そういう時代になってしまいました。アメリカの作家E・Bホワイト（1899〜1985）[2]は、「人間にあまり期待しない」と言いました。「人間は強欲すぎて自然に優しくない。自然を侵していて、人間はやがて滅びるのではないか」と。一方で「反省して希望を持って立ち向かわなくてはならない」とも言っています。人間がホモサピエンスとして地上に現れたのはおよそ15万年前、ところが恐竜が地上に生きていた期間は一億数千万年、アンモナイトは3億数千万年です。人間はわずかの期間に地球に害を及ぼし自らを滅ぼそうとしているかのようです。恐ろしい話ですよね。確かに私たちは自由に生きるべきですが、その自由を間違えている。自分の力でなく生かされている存在であることを、忘れてはならないと思います。

—“Landscape”について

柴田昌一《My Landscape-89 (A)》1989年
エッチング、アクアチント／40.7×55.7㎝　横浜市民ギャラリー蔵

一言でいえば風景ですが、内面的・思想的な風景です。十字架を例として、縦線は天に向かう祈りの直線、横線は人間的な悩み苦しみ争いなどの人間的地平と言う人がおり、“Landscape”はそのような人間的地平を意味しています。日常の言葉では表現しきれないものがあると思います。様々に感じ考えた思想を形にして直截的に表現する側面が制作にはあります。深奥の魂、深く沈んでいるものを表現するというか。静謐な作品、祈りを感じる作品を描きたいと思っています。

柴田昌一《My Landscape-89 (A)》1989年
エッチング、アクアチント／40.7×55.7㎝　横浜市民ギャラリー蔵

—本展出品作《MM21》について

ファンタジックなものを描いたのですが、空の様相や雰囲気に怖さ、孤独な印象がありますよね。私自身もそのように感じていました。自ず と内側から出てくるんでしょうね。

柴田昌一《MM21 (B)》1988年
エッチング、アクアチント／38.0×28.7㎝
横浜市民ギャラリー蔵

—日本水上小学校、聖坂養護学校

創立者の伊藤伝先生は、はじめ東京水上小学校で教員をしていました。学校が民間から公立となり、キリスト教教育ができなくなるため、そこを辞し1942年に横浜に水上学校をつくり、水上生活者の子どもたちの教育を始められました。それが日本水上小学校です。昔は舟（はしけ）で生活をする人がたくさんいて、年中移動している舟の子どもたちは学校へ通えませんでした。私が学校を卒業した当時、中学校の息師から水上学校の八木校長が教師を求めているので行ってみないかと紹介されました。八本一男先生は内村鑑三の身近な弟子のお一人で、お会いするなり一目でお願いすることにしました。住み込みで子どもたちと一緒の生活でした。
働き始めて3年もしたころ、港に輸送革命が起きました。コンテナ船が登場したことで舵も不要になり、何万という沖仲士も失業しました。水上学校も閉校しようかという時に、私が新聞のあるコラムを見つけました。それは知的障がいの子どもたちの苦難についてでした。当時は知的障がい児は就学猶予、就学免除という法律の下に多くが義務教育を受けられませんでした。酷い時代です。そのためお母さんたちが大変苦労しているという内容の記事でした。その記事を読み、これだと思いました。当時横浜に養護学校がつもりませんでした。役員や校長先生に提案し、準備し勉強して小学校だけの小さな養護学校をつくりました。名前に創立者伊藤先生がつけられた学校の前の坂名を付け、聖坂養護学校としました。やがて小学校だけでは困るので、あちこちに資金をお願いして順番に中学校、高等学校とつくり、公立にはない専攻科、更にはその先の社会福祉法人を設立し、いくつもの施設ができました。すべて保護者の皆さん、職員たちと協力してつくりました。私は、その一方で銅版画制作を続けてきました。

—教職と制作の両立

制作も厳しいですが、教育も厳しい。ですが両方の相互作用で頑張ることができたのではないかと思っています。相互が癒し合う力です。また障がい児教育は、知識や技術だけでなく豊かな想像力と心が必要です。お子さん一人一人を理解し在りのままに受け入れ、お互いの間の心地よい空間づくりから始まります。イマジネーションの世界です。制作にも大きな影響を与えたと思っています。

—横浜について

二十代で水上小学校に入ってからずっと職場は同じですから、50年以上横浜・山手に生活しながら教育し、制作してきました。高校時代、住まいは横須賀でしたが、横浜の大さん橋中心にメッセンジャーボーイとして貿易通関手続きのアルバイトをしていました。関内などの辺りの会社を自転車で走り回りました。勉強して英文タイプを打って書類もつくりました。今でもパソコンのワードも得意ですよ。

—連作「ヒロシマ資料より」

2012年に個展「ヒロシマ資料より」を開催しました。前年に広島の平和記念資料館を訪れ、既に内容は知っていたものの、本物に触れ物凄い衝撃を受けました。しばらく今まで描いていた絵が描けなくなり、資料館の溶融塊などを写経のように描き続けました。近年は通常の制作に戻っていますが、また広島をテーマにした制作をしたいと願っています。今度は写すだけでなく、内面で形づくられたものを表現できればと思っています。

柴田昌一《ヒロシマ資料（溶解瓦）》2012年
エッチング／48.0×70.0㎝　作家蔵

—グループ「版17」

グループ「版17」[3]ができたとき（1996年）は版画が盛んな時代でした。神奈川版画アンデパンダン展が国際展になるなど、私も実行委員をしていましたが、諸事情でアンデパンダン展をやめることになり、それが非常に残念で、集まった面々と何かやりたいなとなりました。個展は大変ですしインパクトがない。また、団体展は多すぎて儲が見えない。インパクトある中規模のグループ展ということになりました。フランスの一版多色刷りで有名なペイターのアトリエ名「アトリエ17（Dix-sept ディセット）」[4]に因んで、17人のメンバーによる版画作家グループ「版17」を結成しました。その後24年間、海外展を9回おこない、現地で何回かの木版画の指りのデモストレーションなど行いました。また国際交流展を3回開催するなど活発に活動しましたが、2020年第27回展で終了しました。今後私は人生上のまとまった制作をしたいと願っているところです。

1 作家のアーサー・C・クラークと映画監督のスタンリー・キューブリックの著想により、映画・小説とも1968年にアメリカで発表された。
2 雑誌『ザ・ニューヨーカー』のライターを経て1938年から農場で暮らし、動物がモデルの物語を多数発表した。代表作に『シャーロットのおくりものJ』他。
3 設立メンバーには由木礼、田辺初郎、園山晴已らがいた。柴田は2代目代表をつとめた。
4 銅版画家のS・W・ヘイターがパリで1933年から運営、ヘイターのこの命によより一時アメリカに移された。

柴田昌一（しばた・しょういち）

※横浜市民ギャラリーの出品歴は「出品作家略歴」に記載

1935年　横須賀生まれ
1956年　第1回シェル美術賞銅版佳作
1957年　春陽展初出品（以降継続）
1960年　武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）卒業、全日本アンデパンダン展運動に参加
1961年　日本水上小学校に就職
1974年　日本版画協会展出品（以降継続）
1976年　現代美術選抜展（文化庁）
1980年　日本の版画1980展（栃木県立美術館）
1982年　日本国際美術展（京都市美術館／ブリヂストン美術館賞受賞）
1991年　リュブリン国際反戦版画展（ポーランド／ブロンズ賞受賞）、現代日本美術展（京都市美術館／富山県美術館賞受賞）
1994年　春陽展（同首之助賞受賞）
1996年　版画グループ「版17」結成
2020年「版17」最終展

上記の他、個展、グループ展、国際展参加多数。
現在、日本版画協会会員、春陽会会員、日本美術家連盟会員、学校法人聖坂学院及び社会福祉法人聖坂学園理事長。

出品作家略歴

凡例
■本展出品作家を五十音順に並べた。
■作家名、生（没）年、出生地、主要な略歴、受賞歴、著作の順に記載した。
■【春陽】【版画】は横浜市民ギャラリー企画展を中心とした（コレクション展は除く）。展覧会の表記については『横浜市民ギャラリー30周年記念誌 横浜市民ギャラリー【1964-1994】』（1995年、横浜市民ギャラリー）にならった。

相笠昌義（あいがさ・まさよし）

1939年東京生まれ。1962年東京藝術大学卒業。1979-1980年文化庁芸術家在外研修員として渡西。日本版画協会会員。1989-2008年多摩美術大学教授。1982年安井賞展安井賞。【版画】'88横浜上海美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

天笠義一（あまがさ・よしかず）

1921-2007年。東京生まれ。【版画】'79横浜百景展、'82横浜上海美術交流展

五十嵐英毒（いがらし・えいじゅ）

1931年北海道生まれ。1952年神奈川新聞編集局写真部に入社。著作に『横濱みなとの唄』（1988年、神奈川新聞社）、『出船入船横浜今昔』（2003年、横浜写真協会）等。【春陽】'89五十嵐英毒写真展 よこはま・みなとの唄【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93平横浜サンディエゴ美術交流展

石踊紘一（いしおどり・こういち）

1941年旧満州生まれ。1964年東京藝術大学卒業。1983-1984年文化庁芸術家在外研究員として渡印。【版画】'81第5回春雷展、'82・'88横浜上海美術交流展、'92横浜オデッサ美術交流展

市川勉（いちかわ・つとむ）

1915-1996年。横浜市生まれ。川端画学校で学ぶ。一陽会会員。1936年新文展初入選。【春陽】'79市川勉展【版画】'82・'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展

今関一馬（いませき・かずま）

1926-2009年。東京生まれ。1951年東京大学中退。国画会会員。1999年小山敬三美術賞。【春陽】'87今関一馬自選展【版画】'82・'88横浜上海美術交流展

岩田栄之介（いわた・えいのすけ）

1899-1985年。横浜市生まれ。1921年東京美術学校中退。1931年松島一郎、小島一郎、中島清之らと横浜美術協会を設立。春陽会会員。1943年中川一政賞。1982年横浜文化賞。【版画】'82画業60年記念岩田栄之介展【版画】'82横浜上海美術交流展

岩見禮花（いわみ・れいか）

1927年東京生まれ。1955年文化学院修了。1960年現代版画コンクール賞。1972年地中海芸術協会展高賞。【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

牛田雄村（うしだ・けいそん）

1890-1976年。横浜市生まれ。1907年より松本楓湖に師事、舟画会や紅兄会に出品。1913年頃より実業家・原三渓の援助を受ける。再興院展院友。1914-1916年今村紫紅や速水御舟らと結成した赤曜会で活動。1946年の院展出品以降画壇を去る。

遠藤典太（えんどう・てんた）

1903-1991年。福岡県生まれ。本郷洋画研究所で学ぶ。春陽会会員。1931年春陽展春陽会賞。1977年春陽会展賞。1986年横浜文化賞。【春陽】'75画業50年展【版画】'79横浜百景展、'88横浜上海美術交流展

岡村芳男（おかむら・よしお）

1907-1999年。北海道生まれ。1928年旭川師範学校本科第二部卒業。独立美術協会会員。【版画】'82・'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展

奥村泰宏（おくむら・たいこう）

1914-1995年。横浜市生まれ。1943年文化学院文学部卒業。1951年横浜アマチュア写真連盟結成。著作に『敗戦の哀歌』（1981年、有隣堂）、『ハマの写真の物語』（1990年、横浜市教育委員会）等。【春陽】'90個展ハマの写真の物語【版画】'88年横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

小野肇（おの・はじめ）

1913-1999年。新潟県生まれ。【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展

加山四郎（かやま・しろう）

1900-1972年。横浜市生まれ。1927年東京美術学校卒業。春陽会会員。日本美術家連盟委員。1930年渡仏、アカデミー・ジュリアンで学ぶ。1953-1968年東京藝術大学講師。

川島実（かわしま・みのる）

1910-1981年。横浜市生まれ。1943年日展入選。1972年・1973年新世紀美術展会員特別賞。【版画】'79横浜百景展

清塚紀子（きよつか・のりこ）

1940年旧満洲生まれ。1968年東京藝術大学大学院油絵専攻修了。1968年第32回新制作協会展新作賞。1971年第39回日本版画協会展会友賞。1976年第12回現代日本美術展東京国立近代美術館賞。著作に『航跡』（1989年、美術出版社）【版画】'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

國領經郎（こくりょう・つねろう）

1919-1999年。横浜市生まれ。1941年東京美術学校練上げ卒業。日展評議員。日本芸術院会員。1972-1985年横浜国立大学教授。1983年神奈川文化賞。1989年横浜文化賞。1991年日本芸術院賞。【春陽】'78國領經郎自選展【版画】'68第1回春雷展、'79横浜百景展、'82・'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展

榎庭彦治（さくらば・ひこじ）

1902-1986年。北海道生まれ。1927年東京美術学校卒業。光風会評議員。【春陽】'85榎庭彦治自選展【版画】'79横浜百景展、'82横浜上海美術交流展

柴田昌一（しばた・しょういち）

1935年横須賀市生まれ。1960年武蔵野美術学校卒業。春陽会会員。日本版画協会会員。日本美術家連盟会員。【版画】'81第5回春雷展、'83第6回春雷展、'82・'88横浜上海美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

杉浦幸雄（すぎうら・ゆきお）

1911-2004年。東京生まれ。1929年同本一平に入門。1931年『アサヒグラフ』でデビュー。1932年近藤日出造、横山隆一らと新漫画派集団を結成。日本漫画協会名誉会長。1985年勲四等旭日小綬章。【版画】'78ヨコハマ漫画フェスティバル

杉船久郎（すぎふね・ひさお）

1921年横浜市生まれ。【版画】'88年横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

鈴木健夫（すずき・たけお）

1933年横浜市生まれ。1968年神奈川県美術展写真部門大賞。【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

園山晴已（そのやま・はるみ）

1950年福岡県生まれ。1972年東京造形大学絵画科卒業。1976-1978年文化庁在外派遣芸術家研究員として渡仏、渡米。日本美術家連盟会員。日本版画協会会員。1976年日本版画協会第44回展新人賞。【版画】'88横浜上海美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展

田嶋宏行（たじま・ひろゆき）

1911-1997年。東京生まれ。1934年東京美術学校卒業。【春陽】'88田嶋宏行木版画展【版画】'81第5回春雷展、'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

田中考（たなか・たかし）

1921-2014年。香川県生まれ。1942年日本大学芸術学科縁上げ卒業。春陽会会員。1957年安井賞展安井賞。1986年川崎市文化賞。【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展

ちばてつや

1939年東京生まれ。1957年日本大学第一高等学校卒業。日本漫画家協会会長、文星芸術大学学長。2001年文部科学大臣賞。2002年紫綬褒章。2012年旭日小綬章。2014年文化功労者。2018年手塚治虫文化賞特別賞。著作に『あしたのジョー』（1970-1973年、講談社）等。【版画】'78ヨコハマ漫画フェスティバル

土井俊泰（どい・としやす）

1918-2012年。静岡県生まれ。独立美術協会会員。1958年独立展独立賞。1960年独立展独立美術協会最高賞。1967年ナショナル・デ・ボザール展アンシェ賞。1975年相模褒章。【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展

常盤と子（ときわ・とよこ）

1928-2019年。横浜市生まれ。1950年東京都立家政学院卒業。神奈川県写真作家協会会長。2003年横浜文化賞。2014年神奈川文化賞。著作に写真エッセイ集『危険な毒花』（1957年、三笠書房出版）【版画】'82・'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展

西村建子（にしむら・たつこ）

1940年栃木県生まれ。1979年・1981年日本写真家協会JPS展銀賞。1986年横浜美術協会ハマ展大賞。著作に『哀愁の大地一旧満州—』（2015年、shashasha）等。【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92ょこはまの作家たち、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

萩原英雄（はぎわら・ひでお）

1913-2007年。山梨県生まれ。1938年東京美術学校卒業。日本版画協会理事長。1960年第2回東京国際版画ビエンナーレ神奈川県立近代美術館賞。1967年チェコスロバキア国際木版画ビエンナーレグランプリ。1988年勲四等旭日小綬章。【版画】'88横浜上海美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展

馬場揚男（ばば・かしお）

1927-1994年。東京生まれ。春陽会版画部会員。日本版画協会理事。1982-1993年東京造形大学教授。1963年春陽会展研究賞。1965年日本版画協会展協会賞。【春陽】'87馬場揚男自選展【版画】'81第5回春雷展、'82・'88横浜上海美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

浜口タカシ（はまぐち・たかし）

1931-2018年。静岡県生まれ。1956年日本報道写真家連盟に加入。神奈川二科会会員。1997年横浜文化賞。2011年日本報道写真連盟特別功労賞。著作に『記録と瞬間』（1969年、日本報道写真連盟）、『37年目の再会—中国残留孤児の記録』（1982年、朝日新聞社）等。【春陽】'81北海に生きる、'87ドキュメント日本・激動の日々35年、'92富士秀麗【版画】'82横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93平横浜サンディエゴ美術交流展

林敬二（はやし・けいじ）

1933年横浜市生まれ。1960年東京藝術大学油画専攻科修了。1964-1967年イタリア政府給費留学生として渡伊。独立美術協会会員。女子美術大学名誉教授。1961年独立展独立賞。1982年具象現代展大賞。2008年横浜文化賞。【版画】'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'09ニューアート展2009

林忠彦（はやし・ただひこ）

1918-1990年。山口県生まれ。1938年オリエンタル写真学校卒業。日本写真協会理事。日本写真家協会名誉会員。1979年毎日芸術賞。1983年紫綬褒章。1988年勲四等旭日小綬章。著作に『日本の作家』（1971年、主婦と生活社）、『カストリ時代』（1980年、朝日ソノラマ）等。【春陽】'90林忠彦50年写真絵集展【版画】'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展

古川益弘（ふるかわ・ますひろ）

1931-2020年。横浜市生まれ。1953年明治大学法学部卒業。神奈川区文化協会会長。二科会会員。【版画】'76第3回春雷展、'78第4回春雷展、'79横浜百景展、'82・'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展

三橋兄弟治（みつはし・いとじ）

1911-1996年。茅ケ崎生まれ。1930年神奈川県師範学校卒業。1936年独立美術研究所で学ぶ。水彩連盟理事長。1940年旺玄社展第一賞。1976年水彩連盟展文部大臣奨励賞。【版画】'90三橋兄弟治の世界展

森兵五（もり・ひょうご）

1924-1989年。横浜市生まれ。1946年多摩美術学校専科卒業。独立美術協会会員。1959-1963年横浜美術協会会長。1955年独立展独立賞。【春陽】'91「抽象と形象 大気の世界 森兵五展」【版画】'64横浜市総合美術展、'68第1回春雷展、'79横浜百景展、'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展

森田訓可（もりた・くんじ）

1939-1987年。広島県生まれ。【版画】'79横浜百景展、'82横浜上海美術交流展

柳原良平（やなぎはら・りょうへい）

1931-2015年。東京生まれ。1964年広告制作会社サン・アドを設立。1959年毎日デザイン賞。1977年横浜文化賞。1990年運輸省交通文化賞。2013年海洋立国推進功労者総理大臣表彰。著作に『柳原良平 船の世界』（1973年、誠文堂新光社）、『良平のヨコハマ案内』（1989年、徳間書店）等。【版画】'78ヨコハマ漫画フェスティバル

由木礼（ゆき・れい）

1928-2003年。東京生まれ。1945年日本中学校卒業。1996年版画集展「版17」結成。春陽会会員。日本版画協会会員。【版画】'86横浜美術招待展、'88横浜上海美術交流展、'90横浜オデッサ美術交流展、'92横浜コンスタンツァ美術交流展、'93横浜サンディエゴ美術交流展

2021

うつし、描かれた港と水辺

Landscape of Harbor and Waterside, Mainly in Yokohama

横浜市民ギャラリー
コレクション展
2021

横浜市民ギャラリー
Yokohama
Civic Art Gallery

ごあいさつ

横浜市民ギャラリーには、約1,300点の所蔵作品があります。これらの作品の多くは、1964年の開館以来、企画展や国際展などの機に収蔵されたものです。特に国際展の折には地元作家を中心に横浜の風景を主題として新作を依頼することがたびたびあり、横浜の風景を描いた作品が当館には数多く見られます。今回はその中でも、港や海、水辺を描いた作品を特集します。

横浜港をはじめ、外部との玄関口、物流の拠点である港、古くから絵画や文学で題材となってきた水辺は、人びとの生活に密着する存在であるとともに、郷愁の対象にもなってきました。本展では、横浜を中心に港や水辺をうつし描いた油彩、日本画、写真、版画など、多彩な表現55点をご紹介します。

本展は、本来昨年度に開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会期初日で中止となったことから、再度同内容で開催するものです。まだ感染状況は落ち着かない中ではございますが、映像コンテンツなどを拡充しましたので、併せてお楽しみいただけると幸いです。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた関係者、関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

横浜市民ギャラリー

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。（敬称略）

天笠一則	櫻庭慎吾	永峯千尋	由木浩子
五十嵐英壽	佐々木黎	新納憲司	
石鍋紘一	柴田昌一	西村建子	株式会社美術著作権センター
今関和子	志村富士子	萩原襃	國領經郎顕彰会
岩田楠	田中環子	馬場洋子	特定医療法人財団 慈啓会
牛田雅彦	田中良	浜口隆子	有限会社ちばてつやプロダクション
栗林阿裕子	ちばてつや	林敬二	

鑑賞サポーターによる 作品に描かれたスポット紹介

スポット1 横浜赤レンガ倉庫

多くの観光客が訪れる近代産業遺産である横浜赤レンガ倉庫は、明治末期に最新鋭の倉庫として着工されました。当時は人や物流の拠点として賑わいましたが、関東大震災で被災し、戦後は連合国軍に接収。後に再び倉庫として利用されましたが、コンテナ輸送の台頭にともない、1989年に廃止になりました。その後、横浜市は新港地区のシンボルである赤レンガ倉庫を中心に、歴史と景観を活かした街づくりを進めました。本展出品作から赤レンガ倉庫周辺の1970～80年代における港の変遷がみえてきます。

左 ヨロクカンく倉庫のOL D51> 1975年 ゼラチンシルバープリント
右 現在の赤レンガ倉庫 撮影：鑑賞サポーター

横浜港を見守る横浜のシンボル・赤レンガ倉庫は、青い空に映える姿が印象的です。

スポット2 横浜港大さん橋国際客船ターミナル

横浜開港の象徴・大さん橋は、166年前この地にペリーが来航し、のちにできた波止場の防波堤「象の鼻」に端を発します。1894年に457mの鉄橋が完成すると、貿易で横浜の発展に貢献しました。関東大震災や戦争を経て、客船氷川丸が米シアトル航路に復帰、ブラジル丸が中南米への移住者を乗せるなど、多くの外国客船が運行し、大さん橋は見送りの客で溢れ返りました。当時は海外への玄関口として夢と希望を乗せ世界各地を結び、豪華客船や外国人の見学に2万人が詰めかける活況の時代でした。増改築を重ね、7代目の現在もクルーズ客船が多数寄港しています。

左 五十嵐英壽<大桟橋遠景> 1966年 ゼラチンシルバープリント
右 現在の大さん橋 撮影：当館スタッフ

大さん橋は、まさに横浜の発展と人々の喜び悲しみを見守ってきた港の原点！

スポット3 横浜税関（旧神奈川運上所）

イスラム風の緑青色のドームを持つクイーンの塔と呼ばれる庁舎は、キングの塔（神奈川県庁本庁舎）・ジャックの塔（横浜市開港記念会館）とともに「横浜三塔」として親しまれています。完成時には横浜で最も高い建物で、印象的な意匠から絵画等の題材とされることが多く、本展でも数点見られます。前身は江戸幕府の「神奈川運上所」。1859年横浜港の開港に合わせて関税徴収などのために現在の県庁敷地内に開設後、明治政府に引き継がれて1872年に「横浜税関」と名称変更。1934年に現在地に移転し、関東大震災の復興事業として建築されました。

左 市川監<横浜税関庁内風景> 1936年 油彩、キャンバス
右 横浜税関3代目庁舎（クイーンの塔） 撮影：鑑賞サポーター

横浜三塔を一望できるスポットが大さん橋と赤レンガ倉庫にあります。

スポット4 山下公園

山下公園は関東大震災で発生した瓦礫の埋め立て地を整備して、1930年に開園した国内初の臨海公園です。戦後15年間米軍に接収されますが、その後の横浜マリンタワーの建築や日本郵船氷川丸の係留、「未来のバラ園」造園などの再整備により、公園界隈は横浜屈指の観光地として賑わっています。大さん橋から山下ふ頭に至る全長800mの海辺のプロムナードには、在日イン ド人協会寄贈の「インド水塔」、「赤い靴はいてた女の子像」、サンディエゴ市寄贈の「水の守護神像」など、海外との交流を感じさせる記念碑も点在し、見所となっています。

左 今関一雄<横浜港遠望> 1968年 油彩、キャンバス
右 パリ並びきれいな現在の山下公園 撮影：鑑賞サポーター

本展出品作《インド追想》に描かれているインド水塔をぜひ訪れてみては？

スポット5 横浜ベイブリッジ

1960年代、横浜港はコンテナ船の時代を迎え道路渋滞が激しくなりました。その緩和のため、横浜ベイブリッジは1980年に着工、1989年9月27日に開通しました。本牧ふ頭と大黒ふ頭を結ぶ全長860mの斜張橋（吊り橋）は、世界最大級です。主塔を2基建て、ケーブルを張り橋桁を支えています。本展出品作には建設中の写真や絵が数点あり、横浜ベイブリッジが横浜の新たな開発の発端となったことがうかがえます。日没後はライトアップされ、横浜港の夜景を演出しています。21世紀への現代的な歩みを象徴する軽やかで優美な、未来へ向けての橋といえるでしょう。

左 小野寛<建設中のベイブリッジ> 1988年 カラープリント
右 間近に臨む横浜ベイブリッジ 撮影：鑑賞サポーター

本展出品作は1988年の「横浜百景展」にあわせて制作されたので、ベイブリッジは建設中です。

スポット6 大黒大橋

鶴見区大黒町と横浜港の一大物流拠点である大黒ふ頭を結ぶ大黒大橋は、1971年から3年かけて建設されました。現在は白い斜張橋ですが、当初は朱色に塗装されており、本展出品作にもその姿が描かれています。歩道もあるため、1980年代には釣り人も見られましたが、現在は横浜港やみなとみらい21とともに富士山を眺める絶景スポットとして人気があり、その眺望は関東の富士見百景に選定されました。隣接する横浜ベイブリッジや鶴見つばさ橋より認知度は低いですが、歩いて渡れば、その振動と海を見下ろす恐怖感を味わえる稀有な橋といえるでしょう。

左 馬場晴雪<橋の大黒大橋> 1981年 ドライグラフ
右 現在は白い大黒大橋 撮影：鑑賞サポーター

大黒大橋からの港風景を体感した後、反対岸から風景の中にこの橋を見るのもおすすめ！

■本マップは、横浜市民ギャラリーコレクション展2020の鑑賞サポーター活動の一環として制作しました。■鑑賞サポーター：青木裕子、小軍恵理子、佐藤秀治、佐藤祐介、柴田悦美、長尾京子、三橋泰子、山田稔

展覧会情報

横浜市民ギャラリーコレクション展2021

うつし、描かれた港と水辺

Landscape of Harbor and Waterside,
Mainly in Yokohama

横浜市民ギャラリー
2021年3月5日(金)～3月21日(日) ※3月15日(月)休館
10:00～18:00（入場は17:30まで） 入場無料
横浜市民ギャラリー展示室1、B1

主催：横浜市民ギャラリー
（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）

関連イベント

■ワークショップ「木版画摺り体験 摺りであらわす水辺の情景」
3月6日(土) 14:00～16:00
会場：横浜市民ギャラリー 4階アトリエ
講師：関淳一（横浜美術館主席エデュケーター）
対象：小学生以上（小学生は保護者同伴）

■ハマキッズ・アートクラブ「横浜市民ギャラリーまるごと探検ツアー」
3月14日(日) 10:30～11:30
会場：横浜市民ギャラリー展示室、収蔵庫ほか
講師：河上祐子（横浜市民ギャラリー学芸員／エデュケーター）
対象：小学3～6年生

■鑑賞サポーターによるトーク
3月14日(日) 14:00～
会場：横浜市民ギャラリー展示室1、B1
※新型コロナウイルス感染症拡大状況により中止となる場合があります。

映像コンテンツ

■出品作家インタビュー
今年度収録：柴田昌一氏（版画家）
※会場では昨年度収録の林敬二氏（画家）、西村建子氏（写真家）のインタビュー映像も上映します。

■学芸員による見どころ紹介

■鑑賞サポーターの PICK UP!
鑑賞サポーターがそれぞれのおすすめ作品を紹介。

学芸担当：齋藤里紗、大塚真弓、河上祐子、横田佳子
執筆：齋藤里紗、大塚真弓、河上祐子
鑑賞サポーター：佐藤秀治、佐藤祐介、三橋泰子、平町允

デザイン：宮川洋平（bulwark）
インタビュー映像制作：播本和宣
展覧会紹介映像制作：伊藤浩平、泉桐子

編集・発行：横浜市民ギャラリー
（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／西田装美株式会社 共同事業体）
〒220-0031 横浜市西区宮崎町26番地1
TEL 045-315-2828 FAX 045-315-3033
https://ycag.yafjp.org/

©Yokohama Civic Art Gallery 2021

beyond 2020